琉球大学学術リポジトリ

# 幼稚園教育におけるトータル支援の要素を取り入れた教育実践の一考察：紙ひこうき遊びを5領域に照らし合わせて



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター |
| | 公開日: 2017-06-23 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 武田, 喜乃恵, Takeda, Kinoe |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/36899 |

# 幼稚園教育におけるトータル支援の要素を取り入れた教育実践の一考察

## ―紙ひこうき遊びを５領域に照らし合わせて―

武田　喜乃恵 [1)]

# A consideration about Education practice of total support in kindergarten education

## ：To compare the paper plane play with 5 areas

Kinoe TAKEDA [1)]

**要　約**

今回は、幼稚園で行ったトータル支援の要素を活かした教育実践から、幼稚園教育要領の５領域に照らし合わせて、どのような子どもたちの姿がみられたか記録をもとに整理し、５領域への活用の有効性を考察した。幼稚園教育要領には「遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすること」とあり、エピソード１、エピソード２、表１に示した具体的な子どもたちの姿を整理することからトータル支援の要素を活かした紙ひこうき遊びによる教育実践が、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の５領域の内容を総合的に達成できる要素を有しており、有効であることがわかった。本研究における教育実践を５領域に照らし合わせて考えることで、トータル支援の要素を取り入れた教育実践が小学校の教育実践の基礎となる豊かな育ちと学びの基盤を有していると考えらえた。幼・小の一貫した教育実践を実現していくためにも幼稚園での実践のみならず、「遊び」を活用した教科教育の実践を小学校でも積み上げていくことが今後の課題である。

## １．はじめに

幼稚園教育要領には、幼稚園教育の基本の２項目に「幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすること」とある（幼稚園教育要領，2008）。このように遊びは幼稚園教育の中でとても大切にされている要素である。一方で、能力主義社会への早期からの追い込みにより「より早く、一人で何でもできる」教育が幼児期へと入り込み、幼児期は学校教育への下請け期としての意味しか与えられなくなっていくことを岡本（2005）は危惧している。保育園や幼稚園で、小学校や将来を意識して、読み書きや英語などを取り入れる活動が増えていたり、放課後は習い事や塾に通っていたり、地域で子どもの遊び場や遊び相手が減っていたり、「遊び」がややもすると軽視され、子どもたちから減っている現状もある。

ところで、琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センターでは、平成18年度よりトータル支援教室という主に学童期の学校で気になる子どもたちを対象に遊びや子どもの好きなこと、興味関心を活かしながら支援活動を行ってきた。特に、「遊び」はトータル支援教室の中で大切にしてきた。滝川 (2009) は、「子どもであること」と「遊び」は切っても切れず、子どもを語ることは遊びを語ることで、遊びを語ることは子どもを語ることになると述べている。このように「遊び」は、子どもの生活そのものであり、子どもの成長にとって必要不可欠なものである。

実際に、年齢の高い世代に子どもの頃どんな遊びをしたか内容などを聞くと、遊び道具自体を工夫して自分たちで作って遊んでいたり、遊び仲間が同年齢以外の子どもも含めて遊んでいたりす

1）琉球大学教育学部

る。例えば、虫取り網がなくても、草を輪にしてそこにクモの巣を絡めて虫取り網を作ったり、パンクした自転車のタイヤのチューブを使って野球ボールを作ったり、家にあるもの（糸車やロウソクなど）を使ってミニカーを作ったり、年下の子どもが入る遊びにはその年齢に合わせた特別ルールを設けたりするなどである。そこには、体験の豊富さや人間関係の豊かさがあり、遊びの中にある学びに気づかせてくれる。遊びの中にある学びについて、大人たちが捉えなおしていく必要があるのではないかと考える。

それでは、トータル支援教室の要素とはどういうものなのか述べていきたい。トータル支援ではまず、子どもたちと支援者との関係性の形成をするための子どもたちと支援者のユニットを大切にしている。支援者と子どもたちとの関係性を基盤にして子どもたち同士の関係性へと拡げていく。次の４点をどの企画においても共通する集団支援の目的としている。①子どもたちに楽しい世界を提供する。②安心できる他者との関わりを育てる。③仲間と関わろうとする意欲を引き出す。④仲間と遊びを共有する経験を積み上げる。楽しい活動のなかで「ともに遊ぶ」ことにより他者とともに創り上げる取り組みやルール等の枠組みは「ともに楽しむ」ためにとても大切な決まりごとになる。その結果として社会的振る舞いを体験により自ら学ぶことになる。

支援企画を計画的に忠実に実行することよりも、たとえ計画通り企画の進行が進まなくても、その場で生じる偶発的な出来事を大切にするプロセスが重要である。特に恣意的、強制的に結果の実現をめざすものではなく、あくまでも成果は結果として生まれてくるものと考えている。成果や結果を直接的に求めると子どもたちが「ともに楽しむ」ための「場の雰囲気」が壊れ、「遊び」が膠着して生き生きとした取り組みができなくなってしまう危険性がある。子どもたちのもっている＜手持ちの力＞を使った手応えのある体験を積むことにより＜過ごせる力＞、＜向かう力＞は自ずと育まれていくものと考える。

以上のようなことをおさえながらトータル支援教室から得られた子どもたちの成長の要素を応用して、小学校の教育課程にも位置づけ教育実践を行い検討してきた（武田 ,2016；崎濱ら ,2015）が、幼稚園での実践の検討はこれまでに行っていない。保育園や幼稚園は、子どもが家庭以外を生活の場とする初めの入り口となることや月齢によっての成長の個人差も大きい。また、気になる子やグレーゾーンの子どもなどもいる。インクルーシブ教育では、障害のある子どももない子どもも共に学ぶことを目指している。その意味でも、このように多様な子どもたちがどのように共に過ごし、育ち学んでいくのか実践を通して確認していく必要があると考える。

以上のことから、今回は、幼稚園で行ったトータル支援の要素を活かした教育実践から、幼稚園教育要領の５領域に照らし合わせて、どのような子どもたちの姿がみられたか記録をもとに整理し、５領域への活用の有効性を考察したい。

## ２．方法

### （１）対象について

#### １）公立Ａ幼稚園の実態

園の全幼児の人数は約 73 名。学級数３学級。障害児加配対象の幼児は１名だが、入園後に集団の中への入りにくさや人との関わりに困り感が顕著に表れ、配慮のある援助を受ける園児が３名いる。職員の構成は、園長１名、副園長１名、クラス担任３名、預かり保育担当２名、支援員１名である。園は小学校と同じ敷地内にあり、園長は小学校の校長も兼任している。12 時から 19 時までは預かり保育となり、クラス担任から預かりの先生に交代となる。

#### ２）今回の活動に参加した幼児について

今回の活動に参加した幼児は年長クラス（５歳児）の 25 名である。そのうち、障害児加配対象の幼児１名（自閉症スペクトラム障害）と集団の中への入りにくさや人との関わり困り感のある園児２名も参加した。

#### ３）支援者について

園長１名（Ａ先生）、副園長１名（Ｂ先生）、担任教諭２名（Ｃ先生、Ｄ先生）、預かり担当教諭１名、支援員１名、臨床発達心理士１名（筆者：Ｅ先生）の計７名の支援者で行った。それぞれの支援者が中心にみる幼児を決め、事前ミーティングを行ってから活動に入り、終了後、活動の記録と事後のミーティングも行った。

### （２）本授業の概要

本活動は、預かり保育（教育課程時間外の教育活動）の中の 45 分間で実施した。

#### １）活動内容

**①題材名**　紙ひこうきをつくろう！紙ひこうきであそぼう！

**②題材設定の理由**

初めての活動となるので、集団として動いた

りルール性のあるような活動ではなく、一人からでも取り組め、２人３人と人数が増えても一緒に遊べるような活動が望ましいのではないかと考え「紙ひこうき」を題材として選択した。紙ひこうきを作るにあたって、教師が紙ひこうき博士になって教えたり、いろいろな本を準備したりすることにより子ども同士で折り方を教えたりすることが予想される。また、紙ひこうきを飛ばすときには、一人で飛ばしたり、自分たちで飛ばし方を考えたり、的当てや鬼ごっこなどの遊びを展開できるのではないかと考えられる。紙ひこうきを作れなくても完成品を準備しておくことで、子どもたちが飛ばしたい、作りたいと思うような工夫をする。紙ひこうきを作ったり遊んだりする中で他者との関わりが広がることが期待できると考える。ここでは、幼児の工夫に触れたり関わりを持ったりしながら支援者もともに楽しめる活動にしていきたい。

**③題材の目標**

a. 楽しく活動に参加する

b. 紙ひこうきに興味・関心を持ち、工夫して関わったり、飛ばしたりする。

c. 紙ひこうきをつくる・飛ばして多様に遊ぶことを通して、他者との関わり、やりとりを広げる。

**3）授業の流れと配慮や手立て**

| 活動内容 | 児童への配慮・支援の手立てなど |
|---|---|
| 1．活動部屋に集まり、活動の内容を知る | ・事前に部屋を移動することや今日は特別に遊びをすることを伝えておく。<br>・集まることが難しい場合は、いやすい場所にいてもいい。<br>・活動の場所と時間、注意事項の確認をする。<br>・子どもが紙ひこうきであそぶことに具体的にイメージしたり、興味を持ったりできるようにいろいろな紙ひこうきの見本を準備し提示する。 |
| 2．紙ひこうきを作ろう！紙ひこうきで遊ぼう！ | ・紙ひこうきに関心が向きにくい場合は、子どもの興味・関心を糸口に関わりながら、紙ひこうきとの接点や出会いの機会を探る。<br>・児童の遊びの展開をみながら、かかわりが生まれるような道具（箱や網）を使ってもいい。 |
| 3．片付け | ・片付けと言わなくても見てわかるように教師がビニール袋やタライを持ち周り、子どもたちに紙ひこうきを入れてもらう。 |
| 4．ふりかえり | ・子ども達が自分の気持ちを言いたくなるようなふりかえりをし、感想を引き出す。 |

**4）準備物**

紙ひこうきをつくる紙（折り紙、画用紙、Ａ４用紙）、網４本、フラフープ、クーピー（12食入り３セット）、紙ひこうきの作り方を書いた本、たらい３つ、的になるもの、虫取り網（４本）、フラフープ（４本）、見本の紙ひこうき、はさみ、セロハンテープ、のり

**５）場の構造**

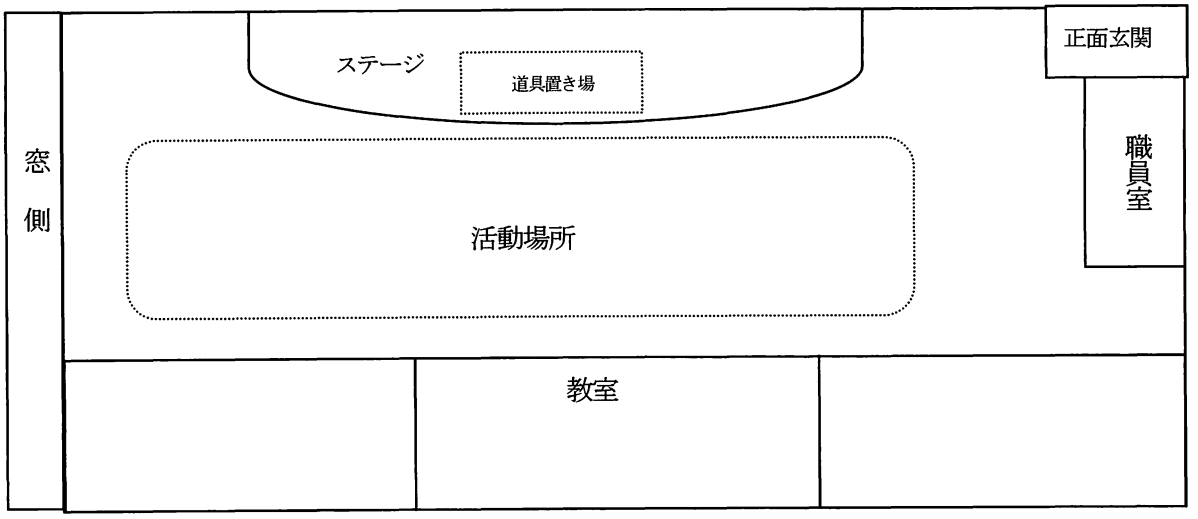


図１　活動を行った場の構造

**（３）分析方法と分析資料**

以下の２種類の資料を分析の対象とした。１）活動終了後に支援者が記載した活動記録、２）３台のビデオカメラによる活動の映像記録。

以上の２点から実際に行った活動のエピソードや出来事を記述する。そして、５領域の項目に照らし合わせて整理し考察する。

## ３．実践の経過と小考察

トータル支援教室の要素を活かした活動から幼稚園教育の５領域に当たる内容の子どもたちの特徴的な姿をエピソード１、エピソード２に記述する。また、５領域のそれぞれの領域におけるエピソードと出来事を表１に整理した。

**（１）エピソードと出来事の整理**

５領域のそれぞれの領域におけるエピソードと出来事を「領域の内容」の項目に沿って表１に整理した。

表１　５領域の内容に関連した活動のエピソードや出来事

| 領域 | 領域の内容 | エピソードと出来事 |
|---|---|---|
| 健康 | （１）先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。 | ・緊張した表情で、支援者の「紙ひこうき作ってみようか」という言葉にも返事がなく、周りの様子をうかがっていた。支援者が折ってあげ、数回投げると周りの飛んでいる紙ひこうきを見たり、他児を見て自ら飛ばしたりする姿が見られ、徐々に笑顔がみられた。 |
| | （２）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす | ・紙ひこうきを投げる、取る。<br>・紙ひこうき当てっこでは、先生が投げて、子どもが逃げる |
| | （３）進んで戸外で遊ぶ | ・紙ひこうきを外で飛ばしたくなり戸外へ出る。 |
| 人間関係 | （１）先生や友達とともに過ごすことの喜びを味わう | ・的があるとそれに向けて投げ、バケツに網にフープに入ったときの喜びを味わっていた。 |
| | （２）自分で考え自分で行動する | ・紙ひこうきを作ることから始めるか、飛ばすことから始めるか自分で選ぶ。<br>・のりが必要なことを知り、自分の糊を取ってくる |
| | （３）自分でできることは自分でする | ・作り方の説明書を見ながら自分で作り始める。 |

| | | |
|---|---|---|
| | （4）いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちを持つ | ・的やフープに当てたり通すために何度も紙ひこうきを投げて挑戦する。<br>・説明書を見たり、教師の援助を求めたりして、紙ひこうきを完成させる。 |
| | （5）友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う | ・「当たった～」「入った～」と喜ぶ |
| | （6）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気づく | ・「俺が」と取り合い。「後で貸すね」と伝え、交代して使う。 |
| | （8）友達と楽しく活動する中で、共通の目的を見出し、工夫したり、協力したりなどする。 | ・的に当てたり、フープにいれたりする<br>・「せーの」で一緒に投げる |
| | （１０）友達との関わりを深め、思いやりをもつ | ・「後で貸すね」と伝え、交代して使う。<br>・「糊あるよ」と糊の必要な友達のために声かけをする |
| | （１２）共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。 | ・網を順番に使う。 |
| 環境 | （2）生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。 | ・どんな紙ひこうきがよく飛ぶのか。どうしたら紙ひこうきがよく飛ぶのか。 |
| | （7）身近な物や遊具に興味を持ってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。 | ・色んな紙ひこうきを作って試したいという思いがあり、どんどん作り変えていた。 |
| | （8）日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。 | ・折り紙や画用紙のかたち、紙ひこうきのかたち |
| 言葉 | （2）したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する | ・感想発表で「紙ひこうきを作ったり、飛ばしたりすることが楽しかったです」と伝える。 |
| | （3）したこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。 | ・「飛行機の作り方教えて」と先生に言う<br>・「行くよー」「キャッチしてよー」と投げる前に合図を送る |
| | （4）人の話を注意して聞き、相手にわかるように話す。 | ・今日の活動内容を聞く |
| | （5）生活の中で必要な言葉が分かり、使う | ・「俺の」と取り合っていた幼児が後で貸すねと伝え相手も待つことができ貸し借りができた。 |
| | （7）生活の中で言葉の楽しさや美しさに気付く | ・「ビューン」って飛んだ！と言葉で表現する。 |
| | （8）いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。 | ・紙ひこうきを飛ばすとき、飛んだとき、キャッチできたときなど、思わず言葉が出る。 |
| | （9）絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。 | ・ペープサートのお話ででてきたドングリを紙ひこうきに書く |
| 表現 | （1）生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 | ・大きい紙、硬い紙など様々な種類の紙が準備されていた。紙ひこうきの種類によって、いろいろな動きをした飛び方があった。 |
| | （4）感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 | ・紙ひこうきを飛ばすときに「シュー」と紙ひこうきの飛ぶ音を表現する。 |
| | （7）かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 | ・紙ひこうきをつくったり、紙ひこうきに絵をかいたりして、その紙ひこうきを飛ばして遊んだ。 |

**（２）エピソード１**

**副園長の記録から（担当児Ａさん、男児）**

Ａさんは、はじめから活動に期待していて、興味深く説明を聞いたり、材料を見たりしていた。そして、すぐに意欲的に取り組み、作り方の説明を見て作り始める様子が見られた。「Ａさん、作るの決まったの？困ったことがあったら先生に声かけてね。」と言うと、「ちょっと難しくなった」とＡさんが援助を求めてきたので、「じゃあ初めから一緒にやってみようか」と１番から確認しながら進めた。折り進める途中では、教師の言葉を自分でも繰り返して（自分に言い聞かせるかのように）丁寧にやろうとする姿がみられたが、早く仕上げたい思いもあるようでやや雑になる面もみられた。

出来上がると飛ばして遊ぶことを繰り返し楽しんだ。そのうち、網を持って（紙ひこうきを）取る役を希望したのでやってもらう。そこへＳさんが「やりたい～」と奪い取ろうしてトラブルになりそうだったが、Ａさんが「俺から…」と言うのを「『終わったら交代するよ」って言ったらいいね』と教師が助言すると、Ａさんは言葉を言い直して伝えることができ、（道具を友達と）共有して使って遊ぶこともできた。

色んな紙ひこうきを作って試したいという思いがあり、どんどん作り変えて楽しめていてよかった。

**小考察**

エピソード１からは、８つの出来事が５領域の内容に当てはまった。まず、「健康」では、「（４）様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む」という内容が、「紙ひこうきを折って作ったり、飛ばして遊んだり、網で紙ひこうきをキャッチしたりすることを楽しむ」という様子が当てはまる。これは、本児が初めから期待感を持っていたこともあるが、様々な紙ひこうきの見本を用意したり、実際に飛ばして見せたり、様々な素材の紙を用意したりしていたことで関心を持って参加できたのではないかと思われた。

次に、人間関係では、（２）（３）（４）（６）（１０）（１２）の６つの内容が当てはまった。「（２）自分で考え自分で行動する」という内容では、「紙ひこうきを作ることから始めるか、飛ばすことから始めるか自分で選ぶ」という様子が当てはまる。このことは活動の中から自分で選択し、行動するということである。「（３）自分でできることは自分でする」では、「作り方の説明書を見ながら自分で作り始める。」という様子が当てはまる。作り方を準備していたことで、自分でできることの幅を広げ、自分でするということにつながったと思われる。また、教師が寄り添って関わっていたことも安心して自分でできることに繋がっているように思われる。

「（４）いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちを持つ」という内容では、「説明書を見たり、教師の援助を求めたりして、紙ひこうきを完成させる。」という様子が当てはまる。

「（６）自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気づく、（１０）友達との関わりを深め、思いやりをもつ、（１２）共同の遊具や用具を大切にし、みんなで使う。」という内容は、「網を取られそうになり、「俺が」と言うが、教師の助言で「後で貸すね」と伝え、共有して使う。」という様子に当てはまる。教師が相手に伝えるといい言葉をＡさんに助言したことで、Ａさんはそれを活かして伝え、取ろうとした友達もそれを受け入れて交代で使うことができたのだと思われる。他のエピソードからもわかるようにＡさんは言葉を手がかりにして、人や物との関わりを進めていける特徴があるのではないかと思われた。

**（３）エピソード２**

**担任Ｃからの聞き取りとビデオ記録から（担当児Ｂさん、男児）**

活動を行う前からＢさんは「みんなで鬼ごっこやりたい」と言っていた。その後も、「鬼ごっこやりたい」と何度も言っていたので、今日の紙ひこうきの活動できるかなとＣ先生は気がかりだった。活動内容が紙ひこうきであるということを伝えると、興味がある様子で聞いていた。実際に、紙ひこうき遊びが始まると、Ａさんはすぐに材料や見本のあるところに行き、自分の作りたい紙ひこうきを見つけて作っていた。最初に飛行機のかたちをした紙ひこうきをＣ先生と一緒に作った。その次に、活動の説明のときに見本で飛ばしたふわふわ紙ひこうきを作りたいと言った。ふわふわ紙ひこうきを作っているグループの中に入って来て、そこで教えていたＥ先生に「作り方教えてください」とＢさんが言った。Ｅ先生は違う紙ひこうきを他児に教えていたので、「今、別の紙ひこうきを作っているから、ちょっと待っていてね」と伝えると、その場でＢさんはＣ先生と一緒に待っていた。他児に教え終わったのでＥ先生が折り方を実際に見せながら一緒に進めると、それを見

て同じように折ることができた。最後に糊を使うのだが、糊が近くになく、「糊もって来る」とBさんは自分で判断し、自分の糊を取りに行った。糊付けは少し糊の量が多くなってしまったために、乾かす時間が必要になったが、E先生が「乾かしてから飛ばすといいね」と伝えると待つことができた。また、周りの友達にも糊が必要な人がいるかもしれないと思ったようで、「糊あるよ」「みんな仲良く使ってね～」と伝える姿もあった。

途中、外で遊んでいる友達を見て、鬼ごっこがしたかったことを思い出したようで、Bさんが「鬼ごっこしたいな～」と言った。C先生が「じゃあ、紙ひこうき使って鬼ごっこしてみる？」と提案した。そして、紙ひこうきを投げて当てっこして遊んだ。それから、Bさんは、うちわも使って紙ひこうきがもっと飛ぶ工夫も自分で考えてしていた。

**小考察**

エピソード2からは、5つの出来事が5領域の内容に当てはまった。まず、「健康」では、（2）の内容が当てはまった。「（2）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす」で「紙ひこうき当てっこで、先生が投げて子どもが逃げる」という様子があった。「人間関係」では、（2）（4）（10）の3つの内容が当てはまった。「（2）自分で考えて自分で行動する」では、「糊が必要なことを知り、自分で糊を取ってくる」という様子があった。「（4）いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちを持つ」では、「説明書を見たり、教師の援助を求めたりして、紙ひこうきを完成させる。」という様子があった。「（10）友達との関わりを深め、思いやりをもつ」では、「「糊あるよ」と糊の必要な友達がいるかもしれないと声かけをする」という様子があった。これは糊がなくて、取りに行った自分の体験をもとに自分だけでなく、周りの紙ひこうきを作っている友達のことを考えて取った行動である。

「環境」では、（2）の内容が当てはまった。「（2）生活の中で、様々なものに触れその性質や仕組みに興味や関心を持つ」で、「どうしたら紙ひこうきがよく飛ぶのか、うちわを使って紙ひこうきがもっと飛ぶ工夫を自分で考えていた」という様子があった。「鬼ごっこしたいな～」というBさんの発言を受けて、教師が「紙ひこう鬼ごっこ」を提案する。

鬼ごっこをしたいBさんの気持ちと活動内容の紙ひこうきとの間の落としどころを教師が探り、提案したことで、Bさんのしたいことと今日の活動内容との間の落としどころを見出し、楽しく遊ぶことができた。日常生活、特に社会生活においては、自分のしたいことがいつもできるとは限らない。そのようなときに、できる工夫や折り合いをつけて自分の気持ちを調整したりコントロールしたりすることに繋がっていく体験になると思われる。

## 4．総合考察

トータル支援教室の要素を活かした活動から幼稚園教育の5領域に当たる内容の子どもたちの姿がそれぞれの領域において表1のように整理された。特に、5領域のうち、「言葉」「人間関係」から多くの姿がみられた。紙ひこうきという一つの遊びから、様々な学習へと繋がっていることが確認できた。武田（2016）、崎濱ら（2015）は、トータル支援は小学校にも活かすことができる活動であることを確認してきたが、幼稚園教育においても5領域の内容をカバーする取り組みであることが明らかになった。そのことからもトータル支援の要素を活かした活動は、領域から教科につながっていく内容であるともいえる。

子どもの遊びを通した教育実践は、その遊びのなかにある学びの要素を、関わる大人がどのように捉え、子どもに問いかけ、次の学びに繋げていくかがとても重要なのではないかと思われる。幼児教育の5領域をカバーする遊びの活動は手持ちの能力を使って参加できるため、子どもたちのいいところが発揮されやすい。子どもそれぞれの参加の仕方ができるよう工夫している。

発達障害をもつ人は昔からいたが、それでも、彼らが何とかやっているのは、たとえば「せっせっせ」とか「お手玉」「縄跳び」「旗あげゲーム」といった昔の遊びが、神経回路のつながりの悪さを回復させたり修復させる機能を果たしていて、遊ぶことを通して、多面的な感覚をプロセスするトレーニングが自然にできていたのではないか、そして、からだの部位を同時に使うような昔の遊びや関わりが神経回路のつながりを育て、いくつもの機能がひとつの脳の中でプロセスされ、統合されてゆくことを手助けしていったのではないかと神田橋（2009）は考えている。また、田中（2011）は無駄なことをたくさんしながら子どもたちが成長してゆく、という過程が喪失し、幼少期から児童期にかけて、子どもたちは意味ある事ばかりするようになっている現代、やはり自由に遊ぶということは、簡単なことではなくなってきていると

述べている。

「遊び」が自由であること、無駄なことを含めて成長していくこと、そのような視点をもち遊ぶことが現代では簡単ではないこと、昔は「遊び」を通して自ずと脳の中でいくつもの機能が統合されていくものであったこと等から、教育実践において、「遊び」そのものが子どもたちへ与える影響について検討することが必要である。今回の紙ひこうき遊びの企画は、トータル支援の企画の目的、①子どもたちに楽しい世界を提供する。②安心できる他者との関わりを育てる。③仲間と関わろうとする意欲を引き出す。④仲間と遊びを共有する経験を積み上げることができることを支援姿勢とするが、「紙ひこうき遊び」はトータル支援の支援姿勢や支援効果を生み出す要素を有している企画であり、教育実践である。トータル支援では子どもたちのもっている＜手持ちの力＞を使った手応えのある体験を積むことにより、子どもたちに＜過ごせる力＞、＜向かう力＞が育まれていく。その＜過ごせる力＞、＜向かう力＞は幼稚園教育要領第２章の「生きる力の基礎となる心情、意欲、態度」（幼稚園教育要領、2008）を育むと考えられる。

トータル支援では、紙ひこうきの支援企画についての支援効果を検討してきた（浦崎・武田、2015）。支援企画の「紙ひこうき」は作るという静的な活動と同時に作品を飛ばして遊ぶという動的な活動要素を含む支援企画である。紙ひこうきを創作し、その創作したひこうきを飛ばしたくなる気持ちの動き、その気持ちをトータル支援では「向かう力」と表現し、大切な子どもたちの情動や身体の動きを捉えるための要素として考えてきた。トータル支援の「支援企画」を媒介として子どもたちのもつ「向かう力」が生まれてくることは支援の効果を捉えるための重要な視点であり、「他者との関係性」に基づく５領域の教育効果としての要素が豊かなものになると考えられた。

今までの「紙ひこうき」を飛ばす支援企画はその場に他者が存在することで、一人で紙ひこうきを飛ばしていた子どもの「向かう力」が、紙ひこうきをボールに代えて他者にボールを投げるという行為へと展開していく姿なども見られた。紙ひこうきを媒介として他者との豊かなやりとりが生まれてくる契機を作っていくことを特徴とする企画であり、トータル支援を代表する企画であると言える。今回の幼稚園での教育実践では、表１より健康の３項目の内容、人間関係の９項目の内容、環境の３項目の内容、言葉の７項目の内容、表現の３項目の内容に採り上げたエピソードの内容を分けることができた。また、全５領域のなかの２５項目の教育内容を扱うことが可能な多様な成果が生まれる取り組みとなった。

紙ひこうき遊びにおける子どもたちの姿を、表１を用いて具体的に５領域に照らし合わせてみると、「健康」においては、支援者が紙ひこうきを折ってあげて飛ばすことで、それを見ているだけで、参加に意欲的でない子どもたちも飛ばしたくなり、投げたり、拾ったりする等の参加が見られるようになった。紙ひこうきの当てっこでは逃げたり、戸外に出たくなったりなど、子どもたちの「向かう力」が見られるようになった。「人間関係」では、説明書を見ながら自分で紙ひこうきを作ったり、自分なりに遊び方を考えたり等の主体的な行動がみられた。的を作るとそれをめがけて紙ひこうきを飛ばしたり、フープを持ってあげるとそれを通すように飛ばしたり等、楽しみながらも熱心に最後までやり遂げようとする行動が見られた。また、それが成功すると友達と喜びを分かち合ったり、一緒に一斉に飛ばしたり等友達と楽しみを共有したりする姿もあった。「環境」においては紙ひこうきという教材に関心を示して、折り紙の形を選んだり、紙ひこうきの形を工夫したりしていた。「言葉」では子どもたちの生き生きとした取り組みから生まれる子どもたちの「向かう力」や感想発表や友達とのやりとりのなかの「豊かな体験」が自分の生きた言葉として現れた。また、「表現」においても紙ひこうきを作ること、そのときの紙の素材に気づいたり、紙ひこうきを飛ばす時に「シュー」と飛ぶ音を表現したりすること等、子どもたちの感性を発信することも見られた。

トータル支援で重要視している「他者との関係性の形成」、「子どもたちを引き付ける企画の魅力」、「集団の場の雰囲気」の３つの要素が幼稚園の実践では機能し、作ってみたい、飛ばしてみたいという「したくなる」という子どもたち原動力となる「向かう力」が様々な場面で生じてきたことが子どもたちの姿から分かった。以上の子どもたちの姿から、「的」や「フープ」を用意したり、みんなで一斉に紙ひこうきを飛ばしたくなるように床に線を引いたり、遊びの展開に応じてしかけや工夫を生み出す支援者が関与する等のトータル支援の要素や支援姿勢を取り入れることで、子どもたちの取り組む意欲が変わったことが分かった。また、紙ひこうき遊びの企画が、子どもたちが育ち学んでいく豊かな要素を引き出しているこ

とも分かった。そのことは幼稚園教育要領の５領域の内容に照らし合わせた「３．実践の経過と小考察」のエピソード１、エピソード２からも裏付けられた。

幼稚園教育要領には「遊びを通しての指導を中心としてねらいが総合的に達成されるようにすること」とある。「３．実践の経過と小考察」のエピソード１、エピソード２、表１に示した具体的な子どもたちの姿を整理することからトータル支援の要素を活かした紙ひこうき遊びによる教育実践が、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の５領域の内容を総合的に達成できる要素を有しており、有効であることがわかった。

本研究における教育実践を５領域に照らし合わせて考えることで、トータル支援の要素を取り入れた教育実践が小学校の教育実践の基礎となる豊かな育ちと学びの基盤を有していると考えらえた。幼・小の一貫した教育実践を実現していくためにも幼稚園での実践のみならず、「遊び」を活用した教科教育の実践を小学校でも積み上げていくことが今後の課題である。

## ５．引用文献

神田橋篠治(2009)「ちばのつどい（三）二〇〇九年」ちば教育研究所

文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説

岡本夏木（2005）「幼児期―子どもは世界をどうつかむのか―」, 岩波新書 ,15-16

崎濱朋子・末吉麻紀・内間貴秋・武田喜乃恵・浦崎武（2015）楽しみのなかから生まれてくる＜向かう力＞と＜受けとめる力＞通級指導教室と特別支援学級の合同実践 , 琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要６号 ,75-87

滝川一廣（2009）「子どもはなぜ遊ぶのか」, そだちの科学 no12, 日本評論社 ,2-7

武田喜乃恵（2016）共に楽しむ授業実践を通した教師と広汎性発達障害児の変容過程－特別支援学級での自立活動による取り組みから－ , 九州地区国立大学教育系・文系研究論文集３巻２号 no12

田中千穂子（2011）「プレイセラピーへの手びき―関係の綾をどう読みとるか」, 日本評論社 , 211-215

浦崎武・武田喜乃恵（2015）発達障害児の集団支援における「向かう力」の生成－「トータル支援」の実践を振り返って－　琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要, 第６号, 51-66